# 新明解国語辞典

金田一京助
金田一春彦
見坊豪紀
柴田　武
山田忠雄

# 新明解国語辞典

[illegible]版～[illegible]版

[illegible]版～[illegible]版

[illegible]

[illegible]

[illegible]

意同

# 新明解国語辞典

金田一京助
金田一春彦
見坊豪紀
柴田　武
山田忠雄

三省堂

# 新明解国語辞典（革装）

定価　一、六〇〇円

昭和四十七年一月二十四日／初版第一刷発行
昭和四十七年二月　一　日／初版第二刷発行

編　集／金田一京助（きんだいち・きょうすけ）
金田一春彦（きんだいち・はるひこ）
見坊豪紀（けんぼう・ひでとし）
柴田　武（しばた・たけし）
山田忠雄（やまだ・ただお）〔主　幹〕

発行者／株式会社　三省堂　代表者　亀井　要
印刷者／株式会社　三省堂　三鷹工場
発行所／株式会社　三省堂
東京都千代田区神田神保町一の一
電話　東京(〇三)二九三一五四一(代)／振替口座　東京一五三〇〇
商標登録番号　三八二五四四

〈新明国(革)・1,248 pp.〉

7581-032427-2774

# 記号・略語表

## 説明用記号

| | |
|---|---|
| ‥ | 用例中の、文と文以外のものとの区分を示す。 |
| ┃ ┃ | 見出し語の代用 |
| ⇩…… | …を参照せよ |
| ↑…… | …から来た・…の略 |
| ↕…… | 反対語は…… |
| ……や…… | …および……・…… |
| ;a・(;b) | ;a または ;b |
| ……;a(;b) | ;a または ;b |
| ;a(;b) | ;a または ;a;b |
| 〔……〕 | 語原・字原・用字法や語釈の補足的説明 |
| 「……」 | 用語・用例の説明 |

## 説明用略号

| | |
|---|---|
| (造語) | 造語成分 |
| (略) | 略語 |
| (雅) | 雅語 |
| (古) | 古語 |
| (俗) | 俗語・卑語 |
| (方) | 方言 |
| 名…… | 名詞形は…… |
| 動…… | 動詞形は…… |
| 自動…… | 自動詞形は…… |
| 他動…… | 他動詞形は…… |
| 可能…… | 可能動詞形は…… |

## 活用略語

〈*は雅語だけ〉

| | |
|---|---|
| (カ) | カ行変格活用 |
| (上一) | 上一段活用 |
| (*上二) | 上二段活用 |
| (*ク) | 形容詞のク活用 |
| (五) | 五段活用 |
| (サ) | サ行変格活用 |
| (*シク) | 形容詞のシク活用 |
| (下一) | 下一段活用 |
| (*下二) | 下二段活用 |
| (*四) | 四段活用 |
| (ラ) | ラ行変格活用 |
| (しする) | サ変動詞 |
| (しなる) | タルト活用形容動詞 |
| (特殊) | ダ活用形容動詞のうち、特殊な活用をするもの |

〔注意〕助動詞・接辞の活用は、「型」を付けて示した。

## 品詞略語

| | |
|---|---|
| (格助) | 格助詞 |
| (感) | 感動詞 |
| (形) | 形容詞 |
| (自) | 自動詞 |
| (終助) | 終助詞 |
| (助動) | 助動詞 |
| (接) | 接続詞 |
| (接助) | 接続助詞 |
| (接頭) | 接頭語 |
| (接尾) | 接尾語 |
| (他) | 他動詞 |
| (代) | 代名詞 |
| (副) | 副詞 |
| (副助) | 副助詞 |
| (連体) | 連体詞 |
| 無表記 | 名詞といわゆる連語・句 |

## 原語名略号

| | |
|---|---|
| イ | イタリア語 |
| オ | オランダ語 |
| ギ | 古典ギリシア語 |
| ス | スペイン語 |
| ド | ドイツ語 |
| フ | フランス語 |
| 米 | 米語 |
| ポ | ポルトガル語 |
| ラ | ラテン語 |
| ロ | ロシア語 |
| 無表記 | 英語 |

〔中国・朝鮮のように「語」の・み略したものは除いた〕

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

# 新たなるものを目指して

人も知るごとく、本書の前身は「小辞林」の語釈を口語文に書き替えることから出発した。今を去る三十二年前の事である。担当者見坊の熱心は、表音式見出しの実施、少なからぬ新項目の増補、近代的編集方針の創始と相俟ち、当時としては珍しく充実した小型辞書を世に送ったため、学生・読書子の迎える所となり今日に至った。その足跡は、戦時中では指定辞書としての位置を占め、戦後では凡百の類書を簇出せしめ、小型現代語辞書のいわゆる「親亀」に擬せられたことによって容易に理解出来よう。

このたびの脱皮は、執筆陣に新たに柴田を迎えると共に、見坊に事故有り、山田が主幹を代行したことにすべて起因する。言わば、内閣の更迭に伴う諸政の一新であるが、真にこれを変革せしめたものは時運であると言わねばならぬ。群書の輩出によって国語辞書の質は漸を逐うて高まっている面は看取されるものの、なお大所高処に立ってこれを観る時、依然として低迷の境に在ることは否定出来ない事実である。生活に密着した若干の語の語釈に誤りが見られ、見出し語において即時代的ならざる欠陥を有することが指摘されたのは一再にとどまらない。もちろん、かかる指摘は他を待つまでもなく、編者自身が最も痛切に感じていた所。前身の改訂版発刊以来十余年の歳月は、編者をして或は新語採集と見出し語の選定に、或は語釈の根本方針の確立に沈潜せしめ、一日として休む日は無かった。ローマは一日にして成らざるたとえのごとく、一日にして成るは辞書ではない。

思えば、辞書界の低迷は、編者の前近代的な体質と方法論の無自覚に在るのではないか。先行書数冊を机

NVS 6/62

上にひろげ、適宜に取捨選択して一書を成すは、いわゆるパッチワークの最たるもの、所詮、芋辞書の域を出ない。その語の指す所のものを実際の用例について　よく知り、よく考え、本義を弁えた上に、広義・狭義にわたって語釈を施す以外に王道は無い。辞書は、引き写しの結果ではなく、用例蒐集と思索の産物でなければならぬ。尊厳な人間が一個の人格として扱われるごとく、須らく、一冊の辞書には編者独特の持ち味が　なんらかの意味で滲み出なければならぬものと思う。かような主張のもとに本書は成った。今後の国語辞書すべて、本書の創めた形式・体裁と思索の結果を盲目的に踏襲することを、断じて拒否する。辞書発達のために、あらゆる模倣をお断りする。

しかしながら、一面から言えば、思索の結果は主観に堕しやすい。今回吾人の施した語釈は、それなりに沈潜の結果成ったものではあるが、シャープならんと欲する余り、限定が大に過ぎるという批評を甘受すべき面が或は皆無ではないかもしれない。公器である辞書の語釈として普遍妥当的なものに成長するためには今後万人の実験を期待する。吾人は歓迎する—そのような意味における読者・利用者の声を。それは辞書を育てる上には必要欠くべからざる要素であると思う。

本書が今見るような形で世に送られるについては、編集期間の最後の四年間の或は全期を通じ或は短期間を限り、次の十君の惜しまぬ協力が有ったことを銘記する。

酒井憲二・若杉哲男・阪田雪子・倉持保男

鈴木真喜男・小笠原　一・山田　潔・長尾　勇・遠藤和夫・對馬友治

また、担当編集者三、四子の献身を多とし、併せて歴代辞書課長・出版部長の斡旋の労に謝する。

昭和四十六年十月

# 編集方針

この辞典は現代の言語生活において用いられる日本語について、その多岐にわたる用法を種種の角度から反省・確認し、あわせて正確・効果的な使用が可能であることを念じて編集された。執筆に当たっては次の諸点を基本方針とした。

**見出し語**

一　**採択方針**　いわゆる自明合成語・擬音語は省略に従った。また、動詞とその名詞形との間に大きな用法の違いの無いものも、一一別掲せず、他を参照させるにとどめた。また、形容詞、いわゆる形容動詞から派生する名詞・動詞は、別掲せず語釈の末尾に太字で示した。

二　**表記**　前著と異なり、「現代かなづかい」と「外来語表記の基準」に従った。また、重要語約五千七百には、＊＊＊の印を付けた。

三　**漢語の造語成分**　「編集方針」の「編」「集」には単語として独立的用法が有るが、「方」「針」には同じ意味ではそれが無い。本書では、後者を一般見出しと区別して、漢語の造語成分と名づけ、原則として奇数ページの左上すみに別枠(ｳﾜ)で囲んで示した。

四　**固有名詞**　アフリカの国名は近来変動が多いことを考慮して、国名はそのすべてを巻末に付載した。

**語　釈**　従来の国語辞典の通弊であった、単なる文字の説明、堂堂めぐりを極力排し、文による解説を主とすることに努めた。

一　**語義の配列**　語義は、現代日本語において通常使用されているものを凝視し、頻度(ﾋﾝﾄﾞ)の高いものから低いものへ、一般的なものから特殊なものへという方向によることを原則とした。古義・原義で、あとへ回すことに忍びないものは、語原として冒頭に注した。

二　**語義の分類**　いたずらに細分することは、かえって読者を迷わすものと考え、大分類に従った。右に伴い、その細分は用例の下のパラフレーズによって示すこととなった。

三　**類義語の弁別**　同義語間の用法の弁別に意を用いた。全く同義と思われるものでも、用法の違いが有ると考えられるものについては、漢語的表現・老人語などの名称のもとにその相違を記述した。

**付　録**　巻末に、文法関係諸表のほか、アクセント一覧・外国地名一覧・日本を中心とした簡易年表・計量単位・二十四気および国民の祝日を中心とする生活暦を付載して、利用者の便を図った。

# 細　則

**見出しの表記と体裁**

1 見出しはゴシック体とし、和語・漢語はひらがな、外来語はカタカナで示した。ただし、すでに慣用久しきに及ぶ約十語は準和語扱いとした。また、和語であっても慣用の有る向きはカタカナ書きに従った。

2 **あいきどう**【合気道】・**ねがわくは**における右傍のカタカナ小字は、現代かなづかいと異なる発音を示す。

3 一見出しの区分は原則として二区分とした。助詞「の・つ」を介するものは助詞までを上位に扱った。また、促音・N音が新たに添加される口語形は、促音・N音からを下位として扱い、元来の変化形と区別した。　**そっけ**【素気】　**ぞっけ**【俗気】

なお、区分は、現代の言語意識に即して行い、必ずしも語原にまではさかのぼらない。起原における区分は、語原として注した。

4 類書と異なり、二字の漢字で表わされる見出しでも、動植物名・固有名詞および借字によるもの（仏教語の音訳や万葉がなによる国名の表記を含む）は区分を設けなかったものが多い。

5 活用語は原則として終止形で掲げ、語幹と語尾に分けられるものは、その間に・を入れた。

**見出しの配列**

6 見出しは五十音順に配列し、さらに同じかなの中では清音・濁音・半濁音、また促音・拗(ヨウ)音・直音の順序に従った。

7 ー をもって表わす外来語の長音は、その場合の発音がア・イ・ウ・エ・オのいずれであるかによって、それぞれの音を表わすかなに置きかえた位置に配列した。

**8 同音語のオーダー**　語の性質・構成については

記号→造語成分→接辞（接頭語・接尾語）→単純語→複合語　の順

語の種類については

外来語→漢語（内部を上の漢字でそろえ、さらに画数順。同画数のものは、康熙字典の順。右に見えない新体は、同画の最初）→和語　の順

品詞の区分については

助詞→助動詞→感動詞→接続詞→副詞→連体詞→用言（動詞・形容詞）→名詞（代名詞はその直前）　の順

表記については

カナ→漢字　の順

同音節数の語の区分については

ハイシャ　歯医者→拝謝・配車・敗者

カ・エル（代える・変える）→カエ・ル（反る・返る・孵る）

のように、上位の音節数の少ないものから多いものへと配列した。

9 類音語およびなんらかの意味で対比される同音語を便宜 [一] [二] で統合した。

10 子見出しとする範囲は、外来語（梵語の音訳を除く）はすべての場合にわたり、漢語は複合語見出しに限り、また、和語は三音節以上に限る。

11 子見出しとしての複合語や慣用句・ことわざの類における共通部分は ー で略示した（活用語の場合は、語幹までを）。

**アクセントの指示**

12 見出しの直下に○で囲んだアラビア数字はアクセント記号である。詳しいことは別項「アクセント解説」を参照されたい。

13 アクセントは、助詞・助動詞・接辞・造語成分等以外の、単語としての用法を持つすべての語に示すことに努めた。子項目・派生語・用語例など、本書における「○で囲んだアラビア数字」はすべてこのアクセント記号である。

**歴史的かなづかいの指示**

14 アクセントに続けて、小字・カタカナで歴史的かなづかいを示した。複合語の場合は区分に従って二行に割り、当該部分だけのカナを示して他は ー で省記した。

例、**あいだ**①ダ【間】　**あいちょう**①チョウ【哀調】

15 用字によって漢字音の歴史的かなづかいが異なる場合は、語釈末尾に注記した。なお、14・15両項に関し、通行の国語辞典・漢和辞典などと異なる問題点については「あと書き」を参照されたい。

**見出し語の正書法**

16 「　」の中にその語の「正書法」を示した。ただし、見出しのかなと同じ場合は省略した。ここで言う「正書法」とは、現代一般に、漢字または漢字かな交じり表記の際の、最も標準的な書き表わし方を指す。表記が幾つも有る場合は、語釈末尾に注釈的に付記して、古来の慣用・昔の用字・代用漢字などの別を示した。

17 いわゆるあて字・難訓に属するものはすべて注釈に回すことを原則とした。ただし、複合語の造語成分として用いられる場合、右の扱いによらないものもある。

例、**ああ**…〔漢文では「嗚呼」と書く〕

つゆ…〔普通、梅雨と書く〕　からつゆ②〔空梅雨〕

**18** 教育漢字を教科書体活字によって示し、当用漢字表外の字には（を、当用漢字表にあっても音訓表に無い読みの場合には〈を付けた。〈も《も、直下の一字にだけ適用される。二字以上同じことを示す場合は（ ）《 》で包んだ。

**19** 送りがなは「送りがなのつけ方」を参考にしたが、一般に省略することが許容されるものについては（）に包んで示した。

**20** ローマ字で書く形が普通であるものも、この欄に示した。

例、アイエルオ—〔TLO〕

**品詞などの指示**

**21** 〔 〕の直下に（かな表記のものは見出し、またはアクセントの直下に）、名詞以外の品詞名を（ ）に包んで示した。

**22** 名詞・副詞のうち、サ変動詞またはいわゆる形容動詞としての用法をあわせ有するものは次のごとく扱った。

名詞のほかにサ変動詞の用法の有るもの

名詞のほかに連体形に「な」、連用形に「に」の用法の有るもの

右のうち、一般には連体形の用法だけのもの

名詞のほかに連体形に「たる」、連用形に「と」の用法の有るもの

右のうち、一般には連用形の用法だけのもの

名詞のほかにダ活用形容動詞とサ変動詞の用法の有るもの

名詞のほかにタルト活用形容動詞とサ変動詞の用法の有るもの

ただし、右の用法は雅馴（ユウジン）と認められるものに限り、網羅（モウラ）することは旨としない。和語についてサ変動詞の指示をしなかったのも、このゆえに基づく。

**23** 動詞は活用の種類と自他の区別を示した。ただし、動詞の自他については疑義も多いので、サ変動詞のうち**22**に関するものは一切これをしるさなかった。動詞のうちの形式的用法は、補助動詞とはせず〔接尾語的に〕などの注記の形で具体的に示した。

例、あ・う　㊀〔自五〕…　㊁〔接尾語的に〕…

**24** 〔造語〕は造語成分を意味する。（↓本文六三六ページ）

**25** 助詞の分類は単純化して、格助詞・副助詞・接続助詞・終助詞の四種とした。

**位相などの指示**

**26** 次の四種のほかは、〔野球で〕〔すもうで〕〔仏教で〕〔数学で〕のごとく具体的に示した。

〔雅〕雅語。日常のくだけた会話や文章には使用されず、短歌・俳句などの詩的表現や文語文に用いられるもの。

〔古〕古語。漢文訓読系統の古風な文章語でしか用いられないものや、江戸時代までは日常語として行われた漢語。

〔俗〕俗語・卑語。内輪の間柄・親しい関係にある相手の間に行われる卑俗な話し言葉。正式の場面や改まった場面では使用を遠慮すべきもの。

〔方〕方言。

**語原などの指示**

**27** 語原・字原の説明を要するものは、語釈の直前に〔 〕に包んで示した。〔 〕の中の読みがなは歴史的かなづかいに従った。

**28** 外来語のスペリングも語原扱いとし、英語以外は原国語名を略記して〔 〕に包んで示した。原語の意味を注記したものも少なくない。

例、サイダー①〔(ca)sidre りんご酒〕…

**語釈の方法**

**29** 語釈に先立って、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などにつ

いての限定を知らせることに努めた。また、必要な反対語の指示も怠らなかった。

語釈の末尾には補足的説明を加えると共に、本文と異なる広義・狭義の用法および転義としての譬喩(ヒユ)的用法を注した。これらに対しては、従来多く語義分類の一目(ムキ)が与えられていた。本書では、最新の意味論の方法に従い、かつ語の用法を立体的・全体的に把握(ハアク)せしめる目的で、分類の項数を減らすと共に、これらを徹底的に注釈の形で呈示したのである。

**30** 類義語相互については次のごとき約束で用法上の差異を明示した。

**漢語的表現**　「弔する」「寵(チヨウ)する」「長生」は、それぞれ「とむらう」「かわいがる」「ながいき」が、それぞれ口頭語において普通に使われるのに対し、同意ではあるが、何ほどか かたよりの有る語と考えられる。それを、改まった場合における漢語としては普通に用いられるものという見地から、上記の術語を用いた。一般には「…の意。漢語的表現」としるし、特に和語を直接音読した関係にあるものについては「…の漢語的表現」としるした。なお、昔→往時→往昔、代代→列代→列世、病気にかかる→罹(リ)病→罹患は、この順に漢語意識の高いものと考えた。「勿怪(モツ)」を「意外」の漢語的表現と考えたのも同様の理由による。従って、漢語的表現は、語の戸籍の別に必ずしもよるのではない。言語意識の差を当面の問題とする。

**古語的表現**　尸位素餐(ソサン)　死する　自然(ジネン)　赭顔(シヤガン)　寂然(ジヤクネン)　寂寞(ジヤクマク)　釈教　借問(シヤモン)　思惟(シイ)　首級　衆徒(シユト)　駿馬(シユメ)　上下(ジヨウカ)

**老人語**　作事場　定めて　さよう　さらば　肉(シシ)置き

**雅語的表現**　さあらぬ　さおとめ　ささめごと　しこめ

**和語的表現**　差し料　しおはま　しろかね　付け火

**語釈の表記**

**31** 当用漢字をフルに使った。存在の意の「ある」「ない」を「有る」「無い」としたのも、その現われにほかならない。また、外字でも見出しに使ったものは、その項では積極的に使用した。

**32** 外字および難読字には（　）内にカタカナ・二行で読みを示したが、昆(ソコ)虫・哺(ホ)乳類 などはルビ無しで ひんぱんに用いた。

**33** 表記は必ずしも当用漢字表の音訓には よらない。生(ハ)える・指(サ)す・入(イ)る・部屋(ヘヤ)・景色(ケシキ)・魚(サカナ)・気持(キモチ)・風(カゼ)・方(ホウ)・交(マ)じる・交(マ)ぜる・交(マ)ざる など、独自の表記を実施した。また、「おこなう」は「行う」「行なって」と使い分けた。

**34** 文中における動植物名はカナがきにした。

**35** 子見出しは かながきを用いず、ただちに正字法をアクセントと共に掲出した。アクセントの上の小書きひらがなは読みを示し、直下のカタカナは歴史的かなづかいを示す。

**36** 用例の読みは、すべてカタカナで示した。また、単独の見出しを別掲しないものについては、アクセントを付けることを旨とした。

**造語成分**

**37** 別枠の造語成分に掲げたものは、本文に載せてある単純語の例と用法が明らかに異なるもののみに限る。しからざる場合は、本文中の用例の末尾に：を施した下にあげるにとどめた。

**38** 本欄に掲げたのは造語力が少なくとも二、三例以上有るものに限った。造語力の乏しいものは、個個の見出しの字原欄で説明を施した。

**39** 本欄には、略号としての ― を一切用いなかった。

**約束的略号**

**40** わずらわしい約束的略号はなるべく用いない方針に従った。やむを得ず使用した少数の例については前表紙見返しに一覧表を掲げた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

# あ

**あ**（亜・阿・啞・(鴉)）→【漢語の造語成分】
**ア** ㊀アジアの略。「中央—③」㊁アフリカの略。「南ナ—①」㊂(日本)アルプスの略。「南ナ—連峰」〔㊀は亜、㊁は阿とも書く〕
**あ** ①感 ㊀呼びかけの声。「—君、ちょっと」㊁急に・驚き(思い出したなどした時に出す、言葉にならない言葉。〔㊀は「ああ」、㊁は「ああ」「あっ」とも言う〕
**あ** ①(一句) 〔古〕直りにくい病気。「—に沈みて宿—」
**ああ** ①(感) 肯定・承知を意味する声。「—、そうでしたか」
**ああ** ①(感) 物事に感じて出す声。「驚き・悲しみ・喜び・嘆きなどを表わす」〔漢文では「嗚呼」と書く〕
**ああ** ①(副) 〔あのよう(に)〕の口語形。「—いう(=あのような)—した(=あんな)・いつも—だから困ってしまう」
**アーク とう** ①〔アーク燈〕〔arc=弧ュ弓形〕向かいあった二本の炭素棒に電流を通じ、その間に白熱した光を出させる電燈。アークライト④。
**アーケード** ③〔arcade〕㊀丸屋根の有る廊下。㊁商店街の道の上に、屋根のようにかぶせたおおい。
**アース** ①〔earth=地球・大地〕㊀電気機械と地面との間に電路を作って、感電を避けたり感度をよくしたりする装置。接地。㊁ ←ュ故障のために電路が大地につながること。
**アーチ** ①〔arch=弓形〕㊀通路の左右から石などを積み上げて、弓形の天井に作ったもの。せりもち。㊁竹・木の骨組みをスギ・ヒノキなどの青葉で包んだ門。緑門。㊂〔俗に、野球で〕ホームラン。「—をかける(=ホームランを打つ)・初—③」
**アーティスト** ①〔artist〕芸術家。アーチスト。
**アート** ①〔art〕美術。芸術。「—デザイナー⑤」——**ディレクター** ⑤〔art director〕演劇の美術的効果や広告のデザインなどについての責任者。——**ペーパー** ④〔art paper〕表面につやの有る、厚手の印刷用紙。アート紙③。
**アーベント** ①〔ドイ Abend=夕方〕ある主題で特定の日の夜間に催される集会。「ベートーベン—(=…の夕べ)」
**アーム** ①〔arm〕㊀腕。「—レスリング④」㊁受話器。㊂ミシンの、本体の部分。——**ホール** ④〔armhole〕洋服のそでつけ線。そでつけ。
**アーメン** ⓪〔感〕〔ヘブライ amēn=たしかに〕〔キリスト教で〕祈りの最後に唱える言葉。
**アーモンド** ①③〔almond〕中央アジア原産の落葉高木。種子は平たくて、卵形。食用にするものと薬用にするものとが有る。旧称、アメンド—⓪。〔バラ科〕「—チョコレート⑧・—ケーキ⑥」
**アール** ①〔フ are〕面積の単位〔略号 a〕。一〇〇平方メートル(=三〇坪余)。
**アール ヒュ** ①〔Rhesus の象徴形。——因子⑦〕人間の血液の成分の一つ。アカゲザルの血と共通の因子を持ち、この因子が母体と胎児の間で一致しないと、死産したり生まれてすぐ重い黄疸になったりする。「—マイナス⑦」赤血球の中にRh因子の無い血液型。母体がこの血液型であると、死産などを起こすことが有る。
**あい** (哀・愛・(陰)) →【漢語の造語成分】
**アイ** (造語)〔eye〕㊀目。「マジック—」㊁眼。「カメラ—〔=カメラによる、対象の切り取り方〕がいい・バッティング—③」——**シェード** ③〔eyeshade〕光線をよけるために使う、セルロイド製の目庇。——**シャドー** ③〔eye shadow〕まぶたに塗る、青・灰色などの化粧品。アイシャード③。——**バンク** ③〔eye bank=目の銀行〕死後、自分の角膜を、日の見えない人に譲るために預ける制度や機関。——**ライン** ③〔eye line〕〔女性が目を大きく見せるために、目のまわりをふちどった線。
**あい** ㊀〔合ゴウ〕〔造語〕㊀…全体の様子(から受ける総合的印象)。「空—・柄ガラ ⓪—・色—・風フウ—」㊁およその程度を表わす。「程—・頃コロ—・潮—・間マ—」㊂おとそ…と言われるもの一般を表わす。「意味—・義理—・情—」
**あい** ㊀〔相〕〔接頭〕㊀互いに。ともに。「—いましめる①」㊁荘重さを特に示すために使う。「—互いに①・—共に①・—会う①・—近い①・療養—かなわず・—成る①」
**あい** ①〔愛〕㊀愛情。「—の手をさしのべる・—の告白・—を誓う・友—・博—・恋—・母性—・人類—③・—欲」㊁そのものに尽くすことこそ生きがいと考え、自分をその中に没入させる心。「学問への—」
**あい** ①②ガ〔(聞)〕㊀〔雅・方〕あいだ。すきま。㊁〔あい狂言・間服〕の略。
**あい** ①ガ〔藍〕㊀畑に栽培する一年草。葉から、あざやかな青色の染料を取る。〔タデ科〕㊁藍色。
**あい** ⓪③〔(藍藍)〕ようす。「その場に居る人の気持が一様にうちとけた様子。なごやか。「和気—」
**あいあい がさ** ⑤アイアイ〔相合(傘)〕一本の傘を男女が一緒に差すこと。
**アイアン** ①〔iron=鉄〕〔ゴルフで〕先を鉄で作ったクラブ。←ウッド
**あいいく** ⓪〔愛育〕ュる 気をつけて子供を育てること。
**あいいれな・い** ①⓪アイ〔相(容れない)〕(形型) ㊀両立しない。「あのふたりは—仲だ」
**あいいろ** ⓪ア〔(藍色)〕濃く深い青色。
**あいいん** ⓪(②)アイ〔愛飲〕ュる 日ごろから好んで(牛乳などを)飲むこと。「—者③」
**あいいん** ⓪(②)アイ〔合印〕㊀書類を照らし合わせたしるしに押す印。合判。㊁二枚以上にわたる書類の、次の紙へ移る移り目ごとに、双方の紙の端へ押す印。

**あ**
〔亜〕㊀㊁…に次ぐ。「亜流・亜熱帯」㊂無機酸で、酸素が一分子だけ少ないこと。「亜硫酸②」㊃(略)ウア
〔阿〕㊀㊁(こ)きげんをとる。おもねる。「阿世①・阿諛」㊂(本来は中国で)人を親しんで呼ぶ時の称。〔日本の「お」に当たる〕「阿父①・阿母①」㊃(略) 阿波ハ国。「阿州①」
〔啞〕話が出来ない人。おし。「啞者①・盲啞・聾啞ロウ」
〔鴉〕カラス。「鴉鷺。①・晩鴉①・群鴉①・帰鴉①」

**あい**
〔哀〕㊀かなしむ。かなしい。かなしみ。「哀調・悲哀」㊁あわれむ。「哀憐ン・哀恤ジュツ・⓪」㊂あわれっぽく。「哀願・哀訴」
〔愛〕㊀自分に属するものとして、かわいがる。「愛児・愛妻・愛犬・愛車・溺愛デキ・盲愛」㊁まだ使えるものとして、大事にする。「愛惜・自愛・割愛」㊂自分の好みに合ったものとして、深い興味を持つ。「愛好・愛読」
〔陰〕せばまった地勢で、通りにくい。「陰路・狭陰」



** *は重要語，⓪①…はアクセント記号，品詞の指示の無いものは名詞およびいわゆる連語。

あいうち―あいしょ

**あいうち**⑩アと【相打ち】同時に、こちらも打つこと。〔相撃・相討ともいう〕

**あいうつ**①アと【相搏つ】(自五) 力を尽くして戦う。「いよいよ両雄―時がまいりました」〔相打つとも書く〕

**アイエムエフ**⑤【IMF】〔↑International Monetary Fund〕国際通貨基金。為替の安定や平価切下げ競争の防止などのために設けた国際機関。

**アイエルオー**⑤【ILO】〔↑International Labor Organization〕国際労働機関。各国の労働条件の改善を目的とする、国連の専門機関。

**あいえんかの**⑩【愛煙家】たばこが好きな人。

**あいえんきえん**⑤アと【合縁奇縁】〔正しくは、合縁機縁〕環境・性格の違う者同士が、ふとした事から親しくなり、あるいは夫婦となり親友となって一生変わらないことのたとえ。〔愛縁と書けば、歴史的かなづかいはアイエン〕

**あいおい**⑩ガと【相生】㊀同じ根から生え出ること。「―の松」㊁〔「相老」に通じて〕夫婦が一緒に長生きすること。

**アイオーシー**⑤【IOC】〔↑International Olympic Committee〕国際オリンピック委員会⑫。

**あいか**①【哀歌】悲しみの気持を述べた歌。

**あいかぎ**②⑩アと【合鍵】その錠に合わせて作った(もう一つの)鍵。

**あいかた**④⑩アと【相方】㊀〔歌舞伎カブキで〕芝居のせりふの間に入れる三味線ミサオ。㊁能の謡ウタイの囃子方カタ。㊂(くるわで)遊興の相手の女。〔㊁㊂は合方とも書く。また、㊁は多く、敵娼と書く〕

**あいがも**⑩ガと【間鴨】カモとアヒルとの雑種。食用。〔合鴨とも書く〕

***あいかわらず**⑩アガと【相変わらず】(副) 今までの通りで変わらない様子。「―だわ・相変わりませず」

**あいかん**⑩【哀感】悲しみの感じ。ものがなしい感じ。

**あいかん**⑩カン【哀歓】「悲しみと喜び」の意の漢語的表現。「―を共にする」

**あいがん**⑩ガン【哀願】―する 泣きつく意の漢語的表現。

**あいがん**⑩ガン【愛玩】―する 身近に置いて大切に取り扱い、慰みとすること。「―〔ペットとして飼う〕動物⑤」

**あいき**1 ㊀【愛機】その人の使用しなれた飛行機・写真機など。㊁【愛器】その人の使用しなれた楽器。

**あいぎ**1【愛戯】愛つたわれる。

**あいぎ**③アと【間着】㊀上着と下着との間に着る衣服。㊁あいふく。〔合着とも書く〕

**あいきどう**③⑩ガと【合気道】日本の武道の一種。柔術から分かれ、関節にかけるわざと、当て身を特技とするもの。合気術。

**あいきゃく**⑩ガと【相客】㊀同じテーブルで飲食する、見知らぬ人。㊁宿屋の都合で同室に泊まり合わせる・他人・未知の人。

**あいきょう**⑨キョウ【愛郷】自分の生まれた土地を良い所だと思うこと。「―心③」

***あいきょう**③キョウ【愛(嬌)】〔「愛敬キョウ」の変化〕㊀憎めなくて、かわいらしい身ぶりやふるまい。「―をふりまく―たっぷり」㊁人を楽しませるユーモア(のあること)。「〔失敗した時に〕今のは―だ・森の―者」㊂客を喜ばせるための、ちょっとした添えもの。「こ―にガムを差しあげます」㊃他から好かれようと、人づきよくふるまうこと。「―をふりまく親善大使」

**あいきょうげん**③キョウゲン【間狂言】能と能との間に狂言師が演じる狂言。あい。

**あいぎん**⑩【愛吟】―する 好きな詩や歌(をうたうこと)。

**あいくち**④⑩アと【合口】㊀つばの無い短刀。㊁話のよくあう・こと(人)。「―がいい」㊂〔俗〕―が悪い〔すもうなどで、に対する相手だ〕」〔㊀㊁は、七首とも書く〕

**あいくるしい**⑤【愛くるしい】(形)〔「くるしい」は、強意の接辞〕子供などの顔があどけなくてかわいらしい。「―笑い顔」―さ④ ―げ③

**あいけいの**⑩【愛敬】〔「敬愛」の意の漢語的表現。「―の念を増す」〕

**あいけんの**⑩【愛犬】㊀〔ペットとして〕飼っている犬。㊁犬の性情をよく知り、かわいがること。「―家⑩」

**あいこ**①【愛顧】―する〔「顧」は、目をかける意〕客にひいきにされること。ひきたて。

**あいこ**⑩③アと【相子】どちらも優劣の無いこと。勝負無し。「これで―だ」

**あいご**①【愛護】―する いじめないで・よきをそこなわずに)保護する。国語の―・動物―⑤」

**あいご**④アと【相碁】〔碁で〕腕前に優劣が無いこと。

**あいこう**⑩カウ【愛好】―する 趣味・(主義)として、その事に親しむこと。「切手―者・平和を―する」

**あいこう**⑩カウ【愛校】自分の学校の名を傷つけないように気をつけ、名誉を高めるように努力すること。「―心③」

**あいごう**⑩ガウ【哀号】〔「号」は叫ぶ意〕(中国・朝鮮で)葬式の時、泣き叫ぶ・習俗(声)。

**あいこく**⑩【愛国】自分の生まれた国を誇りに思い、国の名を・傷つけない(興す)ように行動すること。「―者③―心④」

**あいことば**③アと【合い言葉】㊀〔夜襲・乱戦の時などに〕味方だということを知らせるために使う合図の言葉。㊁同士の結束を固め、仲間の主義・主張を自他に確認させるためのモットー。「都政刷新を―にする」

**あいさい**⑩【愛妻】㊀大事にしている妻。㊁妻を大事にすること。「―家⑩」

***あいさつ**①【(挨拶)】―する〔「挨」は推す、「拶」は迫る意。もと、禅問答におけるやりとりを指した〕㊀人と会った時や別れる時にやりとりする、社交的な言葉や動作。「毎朝の―」初対面の―・時候の―・―そう言われて―〔=返答〕に困った。これは―だね〔=ほかになんとか挨拶のしようが有ろうに、言うに事欠いてなんという―〕㊁その場に居る人に対して、こういう訳で来たのだ・これから会を始める・これでおしまいにするといった趣旨の言葉を述べたり、儀礼として祝意や謝意を表わしたりすること(言葉)。「新任の―・何の―〔=断り〕」

**あいし**①⑩【哀史】悲しい出来事について述べた話。

**あいし**①【哀詩】悲しい出来事について述べた詩。

**あいじ**①【愛児】かわいい(自分の子供。いとしご。愛子①。―④・平家滅亡の―

**アイシー**③【IC】〔↑integrated circuit〕集積回路。

**アイシービーエム**⑦【ICBM】〔↑intercontinental ballistic missile〕大陸間弾道弾⑨。射程が約一万キロの、超長距離用戦略ミサイル。

**あいしゃの**⑩【愛社】「―精神④」〔=自分が勤務する会社の成績を上げようと努める気持〕」

**あいしゃの**⑩【愛車】㊀マイカーを大事にすること。「―振り」㊁日ごろ乗っている自分の車。「―を駆って」

**あいじゃく**⑩ガク【愛着】―する「あいちゃく」の老人語。

**あいしゅう**⑩シウ【哀愁】もの悲しさ。

**あいしゅう**⑩シウ【愛執】相手がかわいくて、思い切れないこと。

**あいしょ**①【愛書】㊀本(を集めること)が好きなこと。「―

家◎」㊁愛読書。

**あいしょう**⓪[哀傷]―する〔詩や歌の形で〕人の死を悲しむこと。「―歌③」

**あいしょう**⓪[愛]〔妾〕気に入りのめかけ。

**あいしょう**⓪[愛称]㊀親しい間柄同士で言う、姓(名前の、一種の略称。例、山本・さん(君)→山さん・山ちゃん・山・やまサン。㊁正式の呼称(「番号」)以外に、個個の特徴や急行列車につける、優美な名称。例、こだま・ひかり・あき。㊂(俗)あだな。例、女の子に付ける、チャコなど。

**あいしょう**⓪―する[愛唱]好きで、いつも歌うこと。「―歌③」㊁[愛誦]好きで、いつも思い出しては声に出して言ってみること。「―する古典」

**あいしょう**③[相性]〔陰陽道の五行説などから見て〕(男女の)性格がうまく合うこと。〔合性とも書く〕

**あいしょう**⓪[愛情]㊀自分の身近に有る人や、自分より弱い立場に有る人に対して、何とか(尽く)してあげたいと思う心。「母(への)―」㊁異性に対して、特にその人でなければと思い、親しむ心。「―を打ち明ける」

**あいじょう**⓪[愛嬢]かわいい(と思っている)娘。まなむすめ。

**あいじるし**③[合い印]㊀味方だということを知らせるための目印。㊁二枚の布を正しく縫い合わせるためにつける印。㊂あいいん。〔㊀は、合標とも書く〕

**あいじん**⓪[愛人]㊀愛する人。恋人。㊁情婦・情夫のえんきょくな表現。

**あい・す**①[愛す](他五)「愛する」の少し古い表現。〔文語ではサ行変格〕「―べき」㊀かわいらしい。「―少女」㊁見所が有り、出来るなら自分がめんどうを見てやりたい気持だ。「―青年」

**アイス**①〔ice〕[一](造語)氷で冷やした。「―コーヒー④・―ウォーター④」[二]アイスクリームの略。「あずき―④・―もなか④」〔明治時代、氷菓子と同音なので、高利貸しの意にも俗用した〕―**キャンデー**④〔和製英語〕棒状に堅く凍らせた菓子。キャンデー。―**クリーム**③〔ice cream〕牛乳・砂糖・卵の黄身を交ぜ合わせて凍らせた食品。〔牛乳の脂肪分八パーセント以上のものと定められている〕―**スケート**⑤〔ice skate〕氷上でするスケート。―**ボックス**④〔icebox〕氷を使う(手軽な)冷蔵庫。―**ホッケー**④〔ice hockey〕アイスリンクでスケートをはいてするホッケー。―**リンク**④〔ice rink〕スケートをする、氷を張った広い場所。スケートリンク。

**あいず**①[一]〔合図〕当事者同士の約束として決めた伝達・確認の方法。〔目・手まね・信号・楽器・のろしなどを使う〕

**アイスバーン**④〔ドEisbahn〕雪の表面が固まって氷のようになった状態(の山の斜面やスキ場)。

**あいすまぬ**①④[相済まぬ]㊀そのままにしておけない。「そんなことでは!」㊁申しわけない。「どうも―ことをいたしました」

**あい・する**③[愛する](他サ)㊀愛憎を持つ。かわいがる。「―人のために、動物を―」㊁好きで、いつもそれに親しむ。「詩を―」㊂かけがえの無いものと思って、大切にする。

**あいせい**⓪[愛婿]気に入りのむこ。〔愛壻とも書く〕

**あいせき**⓪[哀惜]―する〔人の死などを〕惜しみ悲しむこと。「一の念に堪えない」

**あいせき**⓪[愛石]㊀水石など、形や色のおもしろい(庭)石を愛好すること。「一家⓪」㊁自分が愛好する(庭)石。

**あいせき**⓪[愛惜]―する かけがえの無い物として、大事にすること。

**あいせき**⓪[アと[相席]「相客②」と同じ部屋のテーブルにつくこと。「―でお願いします」〔合席とも書く〕

**あいせつ**⓪[哀切]―に―〔非常に哀れで、身につまされる様子。「―な物語」

**あいせっ・する**①[アと[相接する](自他サ)ほかの者を間に置かないで、直接に隣り合う。「領土(を)―両国」

**あいせん**⓪[アと[相先]〔碁や将棋などで〕互いに先番となること。

**アイゼン**①〔ドEisen=鉄〕登山ぐつの底につける、すべり止めの鉄製のつめ。

**あいぜんみょうおう**⑦⑤[愛染明王]愛欲から生まれ、愛欲から離れられないでいる衆生(しゅじょう)の迷いを除くことを念ずる明王。三目六手を持つ。〔毎月二十六日が縁日〕

**あいそ**①[哀訴]―する「哀願」の強調表現。

**あいそ**③[愛想]③(「愛想がない」の短呼)㊀客に心からサービスしようとする、応対の仕方や顔つき。「―がいい。何のお―もございませんで」〔「おかまいも出来ませんで」〕㊁好意を持って、相手になってやる気持。「―が尽きる」〔「余りのばかばかしさにあきれて相手をするのがすっかりいやになる」・都会生活に―を尽かす〔「―」を続ける気持が無くなる〕〕㊂飲食店で客が払う勘定。〔「店の側で言うのが本来の用法」〕「―尽かし」④」相手をするのがいやになって、とりあわないこと。「―笑い④」相手に取り入るための笑い。

**あいぞう**⓪[愛憎]個人に対する好ききらい。

**あいぞう**⓪[愛蔵]―する大切にして、保存すること。

**あいそく**⓪[愛息]かわいがっているむすこ。

**アイソトープ**④〔isotope〕原子番号が同じで、原子量の違う元素。イソトープ③。

**あいそん**⓪[愛孫]かわいがっている孫。

**あいだ**⓪[アと[間]〔「だ」は接辞か〕㊀直接続かない二つの点(物)の非連続部分をみたす空間・時間など。「木立ちの―(「すきま」)から空がのぞく」―(「絶えま」)を誤って痛む」㊁一続きの時間・空間。「休みの―も研究を続ける・私が生きている―(「限り」)ぼそんな事はしないでほしい」㊂問題や関係などの有る双方に属さないもの。あい。「―(「中間」)を取る」―に入って(「仲裁者として」)丸く収める」㊃仲間うちとしての人間関係。「遠慮の無い―(「仲」)われわれの―(「仲間同士」)の問題・生徒の―(「大多数」)に人気が有る・数学者の―(「社会」)では常識となっている」―柄(がら)⓪」㊄血族・親類などのつながりの関係。「親子の―」㊅(交際などで生じる)関係。「師弟の―」―食くい⓪(ぐい)

**あいたい**①⓪[アと[相対]余人を交えず、一対一の関係で何かをすること。「―ずく⓪⑥」〔「ふたりだけの話合いで何かを取り決めること」〕

**あいたい・する**①―③[アと[相対する](自サ)両者が・向かい合う(対立する)。相対する①。

**あいたしゅぎ**④[愛他主義]利他主義。

**あいたずさ・える**①―④[アとずさえる[相携える](自下一)何かを強力に進めるために、関係者が協力する。

**あいちゃく**⓪[愛着]―する今まで慣れ親しんだものから離れたくないと思う心。「古い町名に―を感じる」〔古くは「あいちゃく」〕

**あいちょう**⓪[アと[哀調]もの悲しい調子。「―を帯びた歌声」

**あいちょう**⓪[アと[愛鳥]㊀(野生の)小鳥を愛情をもって扱うこと。「―週間⑤」〔「五月十日から一週間」〕㊁その

**あいつ—あいらしい**

人が大事に飼っている小鳥。

**あいつ**⓪〔彼奴ヲ〕代〔俗〕〔「あやつ⓪」の変化〕あのやつ。

**あいつ**⓪**ぐ**①ア〔自五〕㊀〔相次ぐ〕引き続いて起こる。「—悲報・強豪相次いで」〔=続続〕敗れる。㊁〔相継ぐ〕「引き継ぐ」の改まった表現。

**あいづち**④⓪ア〔相槌〕〔刀を鍛える時などに、打ち合わせる槌の意〕「—を打つ」〔=人の話に調子を合わせる〕。

**あいて**③ア〔相手〕㊀自分と一緒に何かをする人。「相談—⑤・遊び—④」〔=仲間〕。㊁自分と相対して争う人。「—が悪い・けんか—」。㊂自分と組になる人。「結婚のダンスの—」。「—一方⑤⓪」事件に関係する、相手の人。「—取る④」〔他五〕相手と・するして争う。〔狭義では、訴訟の相手として訴えることを指す〕

*アイデア③〔idea=理想・理念・観念〕何かをするについての考え。着想。「いい—〔=思いつき〕だ・—マン④」

**あいでし**⓪ア〔相弟〕同じ先生・師匠について、一緒に学ぶ弟子。同門。

**あいとう**⓪〔哀悼〕—する 人の死を悲しみ惜しむこと。おくやみ。「一の意を表わす」

**あいどく**⓪〔愛読〕—する〔その書物・新聞などを〕好きでいつも読むこと。「一者④—書③」

**あいともなう**①—③〔相伴う〕〔自五〕㊀だれかを一緒に連れる。㊁一緒になって現われる。

**アイドリング**①〔idling〕機械などの空回り。

**アイドル**①〔idol=偶像〕限り無き・崇拝〔寵愛ちょう〕の対象となるもの。

**あいなかば・する**①—②ア〔相半ばする〕〔自サ〕〔よい事と悪い事との・分量〔度合〕が半分ずつである。「功罪—」

**あいなめ**⓪〔鮎〕からだは細長く、緑を帯びた茶色の近海魚。長さは三〇センチくらいで、食用。あぶらめ。〔アイナメ科〕

**あいなるべくは**①ア〔相成るべくは〕出来ることなら。もしよろしければ。

*あいにく⓪〔副〕〔「あやにく⓪」の変化〕物事の進行・成就ジョウを妨げるような事態が起こったことを表わす。「—〔=都合の悪い事に皆さすだった・—〕と病気で行かれない。それは—だ・おいさまも②」〔普通、生憎・合憎と書く〕

**アイヌ**①〔Ainu〕北海道・カラフト・千島に住む、毛深い民族。今は日本人に同化しつつある。〔昔は奥羽地方にも住んでいて、「えみし・えぞ」と呼ばれた〕「—コタン④〔=アイヌ村〕」

**あいのこ**⓪ア〔間の子〕㊀雑種。混血児。㊁種類の違う二つの物の性質を部分的に兼ね備えているもの。「—弁当⑤」〔合の子とも書く〕

**あいのて**③ア〔合の手〕㊀〔邦楽で〕唄ウタと唄との間に入れる、三味線シャミセンだけの短い演奏。㊁間に・入れる〔入る〕音や掛け声。「間の手とも書く」

**あいのり**⓪ア〔相乗り〕㊀〔ひとりで乗るのが普通の乗り物に〕一緒に乗ること。「自転車・タクシーの—」㊁〔俗〕共同でチャンスを利用すること。「一番組⑤〔=二・社以上のスポンサーが共同で提供する番組〕」

**あいば**①〔愛馬〕㊀自分がいつも乗る馬。㊁馬をかわいがること。「—精神④」

**あいはん**⓪ア〔合判〕㊀あいいん。㊁連帯で責任を持つしるしに押す印。

**あいばん**⓪ア〔相判〕普通のノートの大きさの、紙の寸法。縦約二一センチ、横約一五センチ。〔写真乾板では、縦一三センチ弱、横一〇センチ強のものを指す〕〔間判・合判とも書く〕

**アイビー**①〔ivy〕㊀観葉植物の一つ。ツタの変種で、常緑。㊁アイビー・リーグ加入の大学生の、伝統的なスタイル。㊂アイビー・スタイルの略。—スタイル⑥〔ivy style〕アメリカの代表的な大学生のスタイル。長髪の背広で三つボタン、全体はほっそりしている。

**アイビーエム**⑤〔IBM〕〔←International Business Machines Corporation=会社名〕分類・記録・計算・統計などのいろいろの事務処理を行うコンピューターの商標。

**あいびき**⓪ア〔合い挽き〕牛肉と豚肉を、交ぜて・ひくこと。

**あいびき**⓪ア〔逢い引き〕恋し合う男女が人目を忍んで会うこと。ランデブー。〔逢瀬とも書く〕

**あいふ**⓪ア〔合い符〕駅で、手荷物を引き受けたしるしに渡す札。

**あいぶ**①〔愛撫〕—する ㊀常に自分のそばに置いてかわいがること。㊁愛情の表現として、なでたりさすったりすること。

**あいふく**⓪ア〔合服〕〔間服〕春・秋のころに着る洋服。あいぎ。〔合服とも書く〕

**あいふだ**⓪④ア〔合い札〕品物を預かったしるしに渡す・札〔半券〕。〔もとは、割符ブを使った〕

**あいべつ**⓪〔哀別〕悲しい別れ。

**あいべつり**く⑤〔愛別離苦〕〔仏教で〕八苦の一つ。愛する人と別れわかれになる苦しみ。〔俗に、哀別離苦とも書く〕

**あいや**⓪ア〔相《部屋〕〔宿屋などで〕他人同士が同じ部屋に寝泊まりすること。

**あいぼ**①〔愛基〕—する 深く愛し慕うこと。「—の情」

**あいぼう**③⓪ア〔相棒〕〔「駕籠カゴを一緒にかつぐ相手」の意から〕一緒に仕事をする仲間。

**あいぼし**⓪ア〔相星〕〔すもうから起こった語で〕対戦する両者のそれまでの勝ち星・負け星の数が同じである状態。「五勝三敗の—」

**アイボリー**①〔ivory=象牙ゾウ〕象牙色の厚い西洋紙。

**あいま**③⓪ア〔合い間〕何かが行われる「あいだ」の、短い時間。「仕事の—・梅雨ツユの—」

*あいまい⓪〔曖昧〕—な〔「曖」も「昧」も暗い意〕㊀はっきりしない様子。あやふや。「—模糊コ⑤」←明確・明瞭リョウ㊁風儀上、いかがわしい様子。「—屋⓪・—宿ヤド⑤」

**あいま・つ**①ア〔相・俟つ〕〔自五〕〔「俟つ」は期待する意〕「両両相俟って〔=二つの要素が重なって、プラスと成り〕」

**あいみたがい**①④ガイ〔相身互い〕同じ困った境遇にある人同士が互いに同情し、助け合うこと。「武士は—〔俗〕」

**あいみ・る**①ア〔相見る〕〔自上一〕「会見する・見合う」の意。〔相見とも書く〕

**あいま・つ**①ア〔相・俟つ〕〔自五〕〔「俟つ」は期待する意〕「両両相俟って〔=二つの要素が重なって、プラスと成り〕」

**あいみたがい**①④ガイ〔相身互い〕同じ困った境遇にある人同士が互いに同情し、助け合うこと。「武士は—〔俗〕」

**アイモ**①〔Eyemo〕手さげの三五ミリ撮影機の商品名。ニュース映画用。

**あいも かわらぬ**カワラ〔相も変わらぬ〕〔以前と同じ状態で〕少しも進歩が見られない。「—へたな絵」

**あいもち**⓪ア〔相持ち〕㊀代わりあって・一緒に荷物などを持つこと。㊁費用などを等分に負担すること。

**あいやど**⓪ア〔相宿〕同じ・宿〔部屋〕に泊まり合わせること。

**あいよう**⓪〔愛用〕—する いい物と思い、いつもそれを使うこと。使いつけ。「一者③・一車③」

**あいよく**⓪④〔愛欲〕異性に対する強い性愛の欲望。〔遠慮的見地からの表現〕〔愛慾とも書く〕

**あいよめ**⓪ア〔相嫁〕兄弟の妻が互いに呼ぶ称。

**あいらく**⓪④〔哀楽〕悲しみと楽しみ。「喜怒—」

**あいらし・い**④〔愛らしい〕〔形〕かわいらしい。—さ③

[ ]の中の教科書体は教育漢字、〜は当用漢字外の漢字、〜は当用漢字音訓表に無いよみ。

**アイリス**①〔iris〕アヤメなどの園芸品種。生け花などによく使われる。〔アヤメ科〕

**あいりん**⓪〔愛林〕森林を愛護すること。―週間⑤

**あいれん**⓪〔哀憐〕「あわれみ」の意の漢語的表現。

**あいろ**①〔文色〕〔雅〕〔「あやいろ」の変化〕模様。「物の―」〔区別〕も見え分かず〔分からない〕

**あいろ**①〔隘路〕狭くて、けわしい道。〔物事をやりとげる上での困難にもたとえられる。例、「販売の―」〕

**アイロニー**①〔irony〕反語。皮肉。イロニー①。

**アイロン**①〔iron=鉄〕衣服のしわを伸ばしたり、折り目をつけたりするための道具。「電気―④」②髪の毛を縮らせる鏡。

**あいわ**⓪〔哀話〕哀れな身の上話。

**あいわす**①ア〔相和す〕(自サ)ゆきんしつ(琴瑟)

**あう**①ア〔合う〕(自五)〔相和す〕(自サ)①(自五)①基準と同じ状態だ。「時計が合って〔正しく〕いない」②そこで一つになる。「落ち―」③そこで行ける状態だ。「性ショウが―・今度のくつはよく足に―」④食い違いが目立たず、大体同じ傾向を持つ。「話が―」⑤二つの物を組み合わせてみて、色などの感じが抵抗なく見られる様子だ。「服に―ネクタイ・壁紙によく―カーテン」⑥それだけ・労力(元手)をかけても、なんとか やって行ける状態だ。「百円では合わない〔損だ〕」

〔二〕〔接尾語的に〕同じ動作を、向こうもこちらもする。「ほめ―る・なぐり―る」

**あう**①ア〔会う〕(自五)①ある場所で人と一緒になり、互いに顔を見合う(相手を認め合う)。「いつもの場所で―」②偶然に会う。出会う。「意外な所で―」③偶然に、ある出来事を経験する。「夕立・交通事故こわい目に―」〔他動〕会わせる③(下一)〔同能〕会える②〔①②は、遇う・逢う・遭うとも書く〕

**アウタルキー**③〔ド Autarkie〕自給自足。

**アウト**①〔out〕①外(ア)。―ポケット④〔=Ⓐ内ポケット。Ⓑ自動車の操縦席の下に取りつけた物入れ〕②セーフ③セーフ〔野球で〕その回のランナーとしての資格を失うこと。㉔↔イン〔ゴルフで〕コースの前半。〔俗に、アウツと言い、広義では失格・失敗・だめの意にも用いられる〕

**あいりす**―**あおいろ**

―カーブ④〔outcurve〕〔野球で〕ボールが打者の近くで、急に打者の反対側に曲がること。↔インカーブ ―コース④〔和製英語〕①陸上競技のトラックなどの外回りの走路。②〔野球で〕バッターに遠い方の角。ボールの道。↔インコース ―コーナー④〔out-corner〕〔野球で〕外角。↔インコース ―サイダー④〔outsider〕①局外者。〔広義では、常識社会のわく外にある人を指し、時に反逆・無頼・退廃の徒の、時に体制批判の立場に立つ独創的な人の意に用いられる〕②労働組合法の規定にはずれた組合。法外組合。③経済で、協定に加入しないもの。非加盟・者(団体)。↔インサイダー ―サイド④〔outside〕①外側。―キック⑦〔―庭球などで〕ラインの外側にボールが落ちること。↔インサイド ―シュート④〔oushoot〕〔野球で〕自然に打者の反対側へそれる直球。↔インシュート ―ドロップ⑤〔out drop〕〔野球で〕打者の反対側に急に曲がり落ちるボール。アウドロ⓪。↔インドロップ ―プット④〔output〕①〔電気の〕出力。②企業の売り出す資材。産出。③電子計算機が処理して出す結果。㉔レコードプレーヤーや録音機を拡声機につなぐ装置。↔インプット ―ボードエンジン⑦〔outboard engine〕モーターボートなどのエンジンが、船体の外側に付いているもの。アウト。↔インボードエンジン ―ライン④〔outline〕①輪郭。②大要。

**アウトバーン**④〔ド Autobahn=自動車道路〕ドイツの高速道路。

**アウフヘーベン**④〔ド Aufheben〕止揚。揚棄。

**あうん**①〔阿吽〕出す息と吸う息。息の出入り。「一の呼吸が合う〔すもうの仕切りなどで、立ち上がろうとする気持がぴったり合う〕」〔阿・吽とも書く〕

**あえか**①ナ〔かよわく、美しい〕意の雅語的表現。

**あえぐ**②ア〔喘ぐ〕(自五)①息を切らして、苦しそうに呼吸する。②困難な状態で何かをする。「経営難に―」

**あえず**ア〔(敢えず)〕〔接尾語的に〕十分には…することが出来ないで。「取るものも取り―」・涙せき―〔=涙をこらえきれないで〕―言い終わらないうちに」

**あえて**①ア〔(敢えて)〕〔副〕多少の無理を押し切って何かをする様子。―強攻策を取る。―〔=進んで〕…と言う。―〔=心から〕一読を勧める。―〔=無理してまで〕行きたくもない・完璧カンと言うも―〔=決して〕過言ではない。―〔=それほど、格別〕驚くに足りない」

**あえない**①ア〔(敢えない)〕(形)思ったよりもろい結末だ。―最後を遂げる・敢え無くも敗れた」

**あえもの**②③ア〔(和えもの)〕酢・みそなどで和えた食品。〔露物とも書く〕

**あえる**②ア〔(和える)〕(他下一)野菜・魚・貝などを、みそ・酢・こま・豆腐などを加えて交ぜ合わせる。〔名〕和え②「酢みそ―⓪」〔露えるとも書く〕

**あえん**①⓪〔亜鉛〕①青白い色で、もろい金属元素の一つ〔記号 Zn 原子番号 30〕②〔俗〕トタン。―ぶきの屋根」

**あえんか**⓪ク〔亜鉛華〕亜鉛を燃やして作った白い粉。顔料・医薬用。

**あお**①ア〔青〕①三原色の一つ。秋晴れの空の色。②深い海の色。緑。「―葉・―虫」③〔馬の〕つやの有る黒い毛色。また、その馬。

**あおあお**③ア〔青青〕(副)…する 青一色であるという感じを与える様子。

**あおあざ**⓪ア〔青・痣〕①強く打たれたために、皮膚の下に血が出て出来る、青黒い痣。②皮膚の細胞に黒い色素がふえるために出来る、青・黒くて丸い、小さな痣。

**あおあらし**③ア〔青・嵐〕〔短歌・俳句などで〕初夏、青葉のこずえに吹く、さわやかな風。

**あおい**②アク〔青い〕(形)①青の色だ。②顔色が青ざめた様子だ。③〔実などが〕まだ熟さない。―さ①〔①②は、苔いとも書く〕〔―鳥②〕幸福のしるしの鳥。〔メーテルリンクの童話から〕〔―目②〕外国人の目玉。「―の見た日本」

**あおい**⓪ア〔葵〕①アオイ科の植物の総称。フヨウに似た花が開き、葉は多くハート形。②紋所の名。〔狭義では、フタバアオイにかたどった、徒川氏の紋所を指す〕〔―祭(り)④〕京都の賀茂ミ神社の祭り。賀茂祭(カモマツリ)③。〔昔は四月の中の酉トリの日に行なったが、今は五月十五日〕

**あおいき**②ア〔青息〕〔―吐息ヒイキ②⑤〕大変な困難や心配に会って、どうしようもない状態。

**あおいろ**⓪ア〔青色〕〔―申告⑤〕政府の認めたやり方で帳簿を作り、青い用紙に書いて所得税・法人税を申

** ＊は重要語，⓪①…はアクセント記号，品詞の指示の無いものは名詞およびいわゆる連語。

告する仕方。

**あおう**①〔亜欧〕アジアとヨーロッパ。欧亜。

**あおうなばら**④③ア〔青海原〕「大洋」の意の雅語的表現。

**あおうま**⓪ア〔青馬〕つやの有る黒い毛色の馬。青。〔白馬〕〔雅〕白い毛色の馬。「一の節会ゼチ」

**あおうみがめ**④ア〔青海亀〕暖かい海にすむ大亀。四足は掘ジ状。背中の甲は、べっこうの代用。

**あおうめ**②ア〔青梅〕未熟で青いウメの実。

**あおえんどう**③エン〔青豌豆〕緑色のエンドウ豆。さやの中の実を食べる。グリンピース。

**あおがい**②ガイ〔青貝〕㊀螺鈿デンの材料とする、真珠の色に光る貝。㊁アワビの貝の裏をみがいたもの。ボタンなどに使う。

**あおがえる**③ガエル〔青蛙〕アマガエルに似た、大形のカエルの一種。背中は一面緑色。〔広義では、トノサマガエル・アマガエルなど、緑色のカエルを指す〕

**あおかび**⓪②ア〔青黴〕もち・のりなどに生えるかび。緑色で、この内の一種はペニシリンの材料。

**あおがり**⓪ア〔青刈り〕実が熟さないうちに刈り取ること。「—大豆⑤」

**あおき**⓪ア〔青木〕山野に自生する常緑低木。春に紫がかった緑色・小粒の花を開き、冬、赤い実を結ぶ。幹は緑色。〔ミズキ科〕

**あおぎなこ**③ア〔青黄粉〕薄緑色の上等なきなこ。

**あおぎり**⓪②ア〔青桐の意〕庭木・街路樹に用いる落葉高木。葉はキリに似て、幹は緑色。〔アオギリ科〕〔古来の用字は、梧桐〕

***あおぐ**②ガ〔仰ぐ〔他五〕㊀①うつむく。顔を上に向ける。あおむく。㊁①すがる。顔を上げて、上を見る。「天を—」㊂自分より上の人として扱い、その指導に従う。「指導者と—師として—」武人の鑑カガと仰がれる〔=尊敬される〕㊃しかるべき筋に頼んで、何かをしてもらう。「裁可を—・総裁に—〔=なってもらう〕・原料を外地に—〔=…から回してもらう〕」「毒を—」毒を、あおるように飲む。

***あおぐ**②ガ〔扇ぐ〔他五〕〔うちわ・扇などを動かして〕風をおこす。〔煽ぐとも書く〕

**あおくさ**⓪②ア〔青草〕青あおとした草。

**あおくさい**④ア〔青臭い〔形〕㊀切った青菜をかいだ時のような感じだ。㊁未熟な感じだ。——さ④

**あおげ**⓪ア〔青毛〕馬の毛色の名。青みを帯びた黒色。

**あおこ**③ア〔青粉〕㊀青のりを粉にしたもの。㊁タカナの葉を粉にして、食品の色づけに使うもの。

**あおさ**⓪ア〔青海苔〕浅い海の岩につく、平たい緑色の海草。食用。ちぢれのり。〔普通、石莫と書く〕

**あおざかな**③ア〔青魚〕青中の青い魚。例、イワシ・サンマ・サバなど。

**あおざむらい**③ザムラ〔青侍〕年が若くて、ものなれない侍。〔官位の低い者について言う。侠義では、六位の侍を指した〕

**あおざめる**④ア〔青ざめる〕〔自下一〕〔病気や恐れなどのために血の気を失って、青白くなる。「青ざめた顔」〕〔真さめるとも書く〕

**あおじ**⓪アオ〔青地〕織物の地②の青いもの。㊁〔青磁〕陶器などの器具の地の青いもの。「一葉子鉢バ⑤」

**あおじそ**⓪ア〔青紫〔蘇〕シソの一種。葉の色は緑色。夏から秋にかけて白い花をつける。かおりが強く、さしみのつま、一夜漬ヅケなどに使う。〔シソ科〕

**あおじゃしん**③ア〔青写真〕青地に白色で設計図・文字などを表わした写真。〔どうするかについての大体の計画を立ててみる意にも用いられる。例、「まだ—の段階だ」〕

**あおじろ・い**⓪④ア〔青白い〔形〕㊀青みを含んで白い。白いとも書く〕㊁青ざめた様子だ。「—顔」——さ③〔蒼白いとも書く〕

**あおしんごう**③アオシ〔青信号〕進行・安全などを知らせる信号。↔赤信号

**あおすじ**⓪ア〔青筋〕皮膚の上から青く見える静脈。〔怒ったりすると、よく見える〕「—を立てて怒る」

**あおぞこひ**③〔青空こひ〕〔緑内障の意の和語的表現。

***あおぞら**ア〔青空〕㊀③青く晴れた空。㊁〔造語〕戸外で行う。「—教室⑤・—市場③・—駐車⑤」

**あおた**⓪ア〔青田〕㊀稲の青あおしている田。㊁まだ実らない田。「—買い⓪ア」㊂稲のとりいれ前に、収穫高を見越して安く前買いすること。〔畿内・米穀商などが、金に困った米作農家を相手に行なった〕㊃〔俗〕卒業前の学生と入社契約を結ぶこと。〔誤って「青田刈り⓪」とも言う〕

**あだいしょう**⓪③シアウ〔青大将〕ヘビの一種。からだは緑色を帯び、長さ二メートル近くなる。無毒。

**あだけ**②⓪ア〔青竹〕幹のまだ青い竹。

**あだたみ**④ア〔青畳〕新しくて表が青く見える畳。「—のような海上」

**あだち**⓪ア〔青立ち〕〔ほかの稲は とっくに成熟しているのに〕天候不良などのために、未熟のままであること〔稲〕。

**あおっぱな**②⓪ア〔青っ洟〕子供などがたらす、青い鼻汁。

**あおてんじょう**③ジアウ〔青天井〕㊀青空を天井に見立てて言う言葉。野天ジン。㊁〔俗〕無制限。「株価は—」

**あおでんわ**③ア〔青電話〕街頭に設けた、青く塗った公衆電話。街頭に常置、市外通話は近距離だけ。〔正式には「普通公衆電話⑧」と言う〕

**あおどうしん**③ダウ〔青道心〕仏門に入り、僧になったばかりの人。

**あおな**②⓪ア〔青菜〕なっぱ。「—に塩」元気が無くしおれている様子の形容。

**あおにさい**③ア〔青二才〕〔「二才」は、二歳魚の意から転じて未熟な少年の意〕経験の乏しい年少の男を、生意気なやつという気持で指す言葉。〔けんそんの場合にも使う〕

**あおの・く**⓪ア〔仰のく〔自五〕〔「あおむく」の変化。

**あおの・ける**⓪④ア〔仰のける〔他下一〕「あおむける」の変化。図仰のける

**あおのり**②ア〔青海苔〕浅い海で取れる、細長い海草。干して食べる。〔緑藻ソウ類〕

**あおば**①②ア〔青葉〕〔初夏の〕緑色の〔若〕葉。

**あおばえ**②ア〔青蠅〕青黒い、大形のハエ。〔イエバエ科〕〔蒼蠅とも書く〕

**あおびかり**③⓪ア〔青光〕青緑色の光〔に光ること〕。

**あおひとぐさ**④ア〔青人草〕「国民」の意の雅語的表現。〔人がふえるのを草の成長にたとえた語〕

**あおひょうたん**③ア〔青瓢箪〕未熟で青いヒョウタン。〔俗に、やせて顔色の青い人にたとえられる〕

**あおぶくれ**⓪ア〔青膨れ〕顔色が悪くて、むくんだように見えること〔人〕。

**あおぶさ**⓪ア〔青房〕土俵の東側のすみに、土俵場の屋



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com